

# アイスランド語の言語育成について

論文

甲斐崎 由典

早稲田言語研究会（編）

『Travaux du Cercle linguistique de Waseda』 第1号

3～17頁

1996年11月30日発行

（この抜き刷りの頁割りは実際に出版されたものと異なります）

# アイスランド語の言語育成について

甲斐崎 由典

はじめに

まず、次に掲げたアイスランド語の文を見てほしい。

Sjónvarp hefur orðið almenningsseign, kvikmyndir, myndbönd, gervihnattastöðvar, tölvur og útlend forrit og tónlist stytta fólki stundir fremur en bækur<sup>1</sup>.

同じ内容を他の（英語以外の）現代ゲルマン語で表そうとすると、いわゆる「外来語」を多少なりとも使わないと不可能ではないだろうか。もちろん、上の文で使われているアイスランド語の単語も、新しい事物が登場したときに合わせて作られたものであるから、それぞれの音節がアイスランド語に元からあるものだったとは言え、初めは外来語と同じように人々に奇妙な印象を与えたであろう。その意味では、外来語を使おうがわざわざ新しく作った新造語を使おうが、ふたつの方法にさしたる違いはないように思える。しかし、アイスランド語ではひとつの新らしい事物に外来語を使うか新造語を使うかのふたつの選択肢がある場合、「面倒」な新造語を作るやり方の方を選ぶのが普通だ。

筆者の個人的な話になるが、アイスランド語を学ぶ上で特に大変なことのひとつがこのアイスランド語固有の新造語を覚えることである。筆者は英語とドイツ語の後でデンマーク語を学んだが、デンマーク語には相当数の（中低）ドイツ語の単語が入り込んでいる上、3言語ともラテン語などを元にして作られたいわゆる「高尚」な学術用語は共通（例：ルネッサンス）なので、語彙に関してはあまり苦労せずに済んだ。ところがその後で学び始めたアイスランド語では、同じゲルマン語のひとつとして、前の3言語と同根の起源の古い単語は似ているが、それ以外の語彙が全くと言っていい程別物なので、初めはたいへん苦労した。とは言え、アイスランド

語の新造語は基本的に既にある単語やその一部分を組み合わせたたり少し音を変えたりして作られるので、慣れてくると、ちょうど日本語で初めて見る（読めない）漢字語が意味は想像できてしまうのと同じような「勘」を働かせることができるようになる（ルネッサンス：endurreisn）。

この初めて見る単語でもある程度意味の想像ができる、という事実は、その類推の可能性が今度はその単語の記憶を容易にするという帰結と合わせて、当然アイスランド人<sup>2</sup>自身にもアイスランド語の長所のひとつとして認識されているのだろう。しかし、アイスランド語が、このせわしない現代社会においても頑としていちいち新事物に新造語を作り出し、そしてそれがアイスランド人に受け入れられているのは、上に述べた長所の認識だけでは説明できないだろう。第一、新しい事物に自分の言語にある部品だけを使って名称を与えるという作業は、別にアイスランド語だけに特徴的なわけではなく、本来全ての言語で絶えず行われるべきものであったろう。それが行われない時があるのはなぜかと考えると、その言語の使用者の怠慢や外来語に対する「憧れ」などの他に、特に現代ではせっかく新しい単語を考え出しても、その普及がその新事物自体の普及の速さに追いつかないことが原因であることが多いと思う。そうだとすると、いくら話し手が比較的少ない言語であるとは言え、アイスランド語で最新の事物に対しても大抵新造語がしっかりと根付くことは、今度は逆に不自然なことのようと思われる。かと言ってアイスランドでは最新の事物が他の国と比べて遅れてゆっくと広まるわけでもない。一体どんな方法によればこのような「迅速な」新造語の定着が可能なのだろうか。

アイスランドに留学生として来て、毎日生のアイスランド語に触れるようになってからはや半年が経つが、この前々から気になっていたアイスランド語の一見不自然に見えるかたくなな新造語偏重を中心に、アイスランド語の言語育成<sup>3</sup>について少し調査・取材を行ってみたので、その結果をこの極北の島の見聞記に代えてここでまとめてみたい。

## 1. アイスランド言語委員会と用語委員会

まず、新しい事物が外から入ってきたときに、アイスランドでは誰がど

のようにしてその新事物に対するアイスランド語での名称を決めるのか、具体的なところから見ていこう。ここで組織的に大きな役割を果たすのは、アイスランド言語委員会（Íslensk málnefnd）と様々な専門分野毎に存在する用語委員会（orðanefnd）である。

最初用語委員会は、1919年に発足した技術者協会用語委員会（Orðanefnd Verkfræðingafélags）であるが、これは分野別専門用語一覧を何冊かと、それらを集大成した専門用語集を発行した後、1941年電気技術者協会用語委員会へと発展解消する<sup>4</sup>。以来細分化する一方の科学技術や日々生み出される新事物の増加に伴ってこの種用語委員会は増え続け、筆者がアイスランド言語局（後出）に問い合わせたところによれば、この最古参の電気技術者協会用語委員会を含めて、現在（1996年3月）では39の用語委員会が様々な分野毎に存在する。それぞれの用語委員会の発足した年<sup>5</sup>を見ていくと、1979年までは僅かに6つの用語委員会しかなかったのが、1980年以降急速に増えたことがわかる。特に1985年以降は、多い時で1年に5つ以上の用語委員会が発足している。ここで特に注意すべきことは、こうした数々の用語委員会は、別に政府の意向に沿って召集されたのではなく、各分野の専門家達の間から自発的に結成されていることだろう。

これらの用語委員会の活動は分野毎の専門用語を決めるという、もっぱら専門家のための機関であるが、当然のことながら、もっと広く一般人の日常の言葉のためにも、似たような機関の必要性が高まってくる。この場合、どういう単語を使えば良いかという比較的単純なことの他に、正しい言い回しや発音の仕方はどうかなど、様々な問題を扱わなくてはならないという点で、分野別用語委員会とはかなり質の異なる専門機関が要求されることになる。こうしてアイスランドでは、1965年に北欧諸国では最も遅く言語委員会（Íslensk málnefnd）が発足する<sup>6</sup>。このアイスランド言語委員会は文部省の一機関として議会で承認されて発足したものであるが、委員会の任務が正式に法によって定められたのは1984年になってからである<sup>7</sup>。そこでは、アイスランド言語委員会は、アイスランド語の保守・発展を図るという理念の元、政府のアイスランド語に関わる様々な政策決定のための文部省の一諮問機関として機能する他、人名・地名を取り扱う諸機関やマスコミや学校等、言葉に対する影響力の大きい組織と連携を密にし、一般からのアイスランド語にまつわる様々な疑問に助言を与え、また関係す

る用語委員会等と協力して新語一覧の作製や必要とあれば新語を作製し、さらには正書法辞典やアイスランド語の様々な問題に対する指針をまとめた文書の発行などの出版活動を行うべきことが定められている<sup>8</sup>。委員の任期は4年で、1994年1月以来はアイスランド大学(人)文学部教授のKristján Árnasonを委員長として様々な分野から選ばれた14名の委員がアイスランド言語委員会を形成している<sup>9</sup>。また1985年には、増加する言語委員会に対する要求と仕事量に対応するため、委員会の作業を実際に行う付属機関としてアイスランド言語局(Íslensk málstöð)が設立された<sup>10</sup>。アイスランド言語局はアイスランド言語委員会の任務に沿って、アイスランド語に関する様々な疑問を電話等で受け付けて助言を与えたり<sup>11</sup>、また一般をも対象とした新語・専門用語の公的機関としてアイスランド語の語彙の整備保守を行っている<sup>12</sup>。ただし近年は山積する課題の割に必要な予算と人員の調達が追い付かず、1993年以降発行できなくなったアイスランド言語委員会会報(Málfregnir)の後、唯一の言語委員会からの定期刊行物となったアイスランド言語局年報からは委員や局員のいらだちが見て取れる。

さて、これら二種の言語機関は、共にアイスランド語の保護を目的とし、アイスランド語の語彙を整備するという具体的な共通の任務もあるわけであるから、アイスランド言語委員会発足後すぐに両者の緊密な協同作業が期待できそうだが、実際に両者が公けの場で協議を行うようになったのは1979年になってからであった<sup>13</sup>。しかしこの初会合では、様々な議題の内、特にコンピューターを利用した専門用語登録(iðorðabanki)をアイスランド言語委員会を中心に各用語委員会が協力して進めることが初めて提案されたこともあって、以降は両者の関係は緊密なものとなっていく<sup>14</sup>。この専門用語登録自体は1981年から段階的に進められてはいるが、まだ実用段階には至っていない<sup>15</sup>。因に、これとは別に作製が進められている、Sigfús(1920-1924)の全ての見出し語を中心に約15万語を含むアイスランド語語彙集(Íslensk orðaskrá)の方は1997年までにはコンピューター・ネットワークを介して一般にも解放する予定だそう<sup>16</sup>。

以上述べた二種の言語機関の他、もちろん個人や特定の組織が新しい事物に対してアイスランド語の名称を提案し、受け入れられていくことも少なくなく<sup>17</sup>、他の国の場合ときちんと比較したわけではないが、アイスランドではこのような「民間」での自分達の言葉、特に新語に関する議論が

盛んであると言えると思う。例えば、昨年末に創刊されたばかりのコンピューター雑誌（Tölvuheimur、アメリカのPC Worldの姉妹誌）でも、毎号この分野での最新の事物に対するアイスランド語の名称には何が一番ふさわしいか等について、編集部と読者が様々な意見を述べるための紙面が設けられている。そこでは初回以来さっそく活発な意見交換が行われていて、例えば「インターネット」を表すアイスランド語として国内最大の日刊紙MorgunblaðiðはAlnetを提案したが、編集部としてはこの新語を認めたくないのので当分暫定的にInternetをそのまま使い、そして読者から良い提案があれば歓迎する、という呼びかけに対して毎号読者から様々な提案がなされている<sup>18</sup>。

また、新語の問題も含め、広くアイスランド語を守って行くための目立った動きとしては、乳製品供給源として国内最大のシェアを占める牛乳協同販売（Mjólkursamsalan）が1995年から始めた、牛乳パックの片面全部に印刷された「アイスランド語は私たちの言葉（Íslenska er okkar mál）」という一連の読み物が挙げられる。そこでは子供から大人まで誰にでもわかり易いように、日常での具体的な例を取り上げながら良いアイスランド語、正しいアイスランド語の普及が目指されている。一例を挙げると、まず「Hljónstræng?」という表題の下に、「hljómsveitaræfing（バンドの練習）」という言葉がよくこのように発音されていると説明し、その後そういう話し方をする若者の会話の例<sup>19</sup>が挙げられ、最後に「はっきり話そう（Tölum skýrt!）」と締めくくられている。牛乳協同販売では、この「言語広告」を1995年の創業60周年を記念して5年間で総額3000万クローナをつぎ込んで行うひとつの新しい企業事業として説明しているが、そこには今後増加が予想される海外製品の流入に対抗して国産品を売っていくためには、同じ「アイスランド製品」であるアイスランド語を利用すると良い、という販売戦略上の発想があるようだ。しかし、これが単なるマーケティング上の戦略のひとつではなく企業事業である所以として、牛乳協同販売では牛乳パックの言語広告と並んで、アイスランド語を守っていくための様々な活動に資金援助を行うとしている<sup>20</sup>。この資金援助事業の方も既に始められていて、牛乳協同販売は1994年10月18日にアイスランド言語局に対してSUNワークステーションの他、パーソナルコンピューター数台とソフトウェアをいくつか寄付し、さらにアイスランド言語委員会が同じ様にアイス

ランド語育成活動に対して提供する言語育成基金（Málræktarsjóður）にも今後資金援助を行うことが取り決められた<sup>21</sup>。

## 2．なぜbréfasímiは良くてfaxは良くないか<sup>22</sup>

次に、アイスランド人がなぜ熱心に自分達の言葉を守ろうとするのか、あるいはアイスランド語を守ろうとする動きにはどのような考え方があるのか、やはり新事物に対するアイスランド語の名称として外来語を嫌い、かたくなに新造語を作っていく理由を探りながら明らかにしてみたい。

まず、アイスランド語にはこの問題に関して一見よく似た用語がいくつかあるのでそれについて述べよう。まず最もよく使われる言葉は言語育成（málrækt<sup>23</sup>）であるが、これはもっと狭い概念の言語保守（málvernd）の上位概念と考えることができる。すなわち、言語は様々な要因により絶えず変化していくものであるが、変化の仕方によっては、変化以前と以後の言語に断絶が生じてしまい、相互に理解ができなくなる。これを防ぐためにはそうした変化が言語に定着しないようにする必要があるが、そのために行われる活動が言語保守である。ところが、その言語が使われている環境、すなわちその言語の話し手自身が置かれている状況も絶えず変化していくものなので、余り言語保守が行きすぎると今度はその言語は周囲の環境にそぐわない不便なものとなってしまう。そうならないために行われる活動が、例えば既に述べてきた新造語のきちんとした整備等の言語育成である。また、言語保守において、言語の既に定着している部分にもその言語の純粋性を求めるという考え方から手を加えようとする動きが言語純化（málhreinsun）である<sup>24</sup>。アイスランド語の言語育成は、既に述べたように徹底的に新事物にもアイスランド語らしい新名称を作り出していくことから、一見すると随分と言語純化的発想が強いように見えるが、既に独立国家としての歩みを始めてから50年が過ぎた今、そこにはどのような動機があるのだろうか。

アイスランド語育成のための唯一の政府機関であるアイスランド言語委員会の任務は現在では法によって規定されていることは既に述べたが、そこにはそもそもなぜアイスランド語の言語育成を行わなくてはならないか

ということについては書かれていない。一方、1984年にアイスランド文部省は、言語育成、特にアイスランド語の発音に関しての義務教育やマスメディアのあり方を探るために、言語委員会とは別に<sup>25</sup>特別な諮問委員会を臨時に召集し、発音教育を中心にいくつかの問題について専門家による提案を行わせた<sup>26</sup>。同委員会は1986年の10月に最終答申書を提出してその役目を終えたが、そこでは冒頭にアイスランド語の言語育成の基本的な考え方が述べられている<sup>27</sup>ので、ここに一部引用してみよう。

「アイスランド人は自分達の言語の維持と育成に務めてきた。

アイスランド語を維持するとは、世代間の言葉のつながりに断絶が生じないようにすること、それは特に初期の書き記された文学作品から今使われている言葉までの間に存在し続けてきた結び付きが失われないように努めることである。

アイスランド語の育成とは、特に、何についてもアイスランド語で話したり書いたりすることがいつでも可能となるように語彙を増やすこと、さらには言葉を扱う能力の向上をはかり、アイスランド語の価値に対する信頼を高めることである。

維持と育成は対立するものではない。言語の本質、構造、特質というものは保たれなくてはならない。その一方で、言語は、ある一本の樹木が絶えず同一の樹木でありながら生長し豊かになっていくのと同様に育っていくべきものである。<sup>28</sup>」

ここで、初期の文学作品から現代語までのつながりの維持の重要性というのは、従来からアイスランド語の育成の根本理念としてよく強調される点である<sup>29</sup>。これはアイスランド人が、今尚遠い昔に書かれた自分達の文学作品をさしたる困難もなく楽しめるという事実から生まれた考え方だと思われるが、当然のことながらその間に言語にほとんど変化がなかったというわけではない。それは特に語彙について明確であろう。たとえばどんなに語法や構文の点で古い時代のアイスランド語に似せたところで、冒頭に挙げたアイスランド語の文を、例えばSnorriの時代のアイスランド人に理解させることは、現代の事物について述べてあるという事実はともかく、当時には存在しなかった単語を含んでいるので不可能であろう。そう考えると、上に引用した考え方に従って、言語の維持と育成を同時に成功させるには、新しい事物を表すために新造語を作り出すよりも、例えばsímiと

いう単語のように、既にアイスランド語の語彙として存在する単語に新しい意味を与えていくやり方が望ましい、ということにはならないだろうか。しかし実際には、アイスランド人は新しい単語が必要になったときには、ある別の単語の音を少し変えたり、様々な接頭辞や接尾辞を利用したり、複数の語を組み合わせたたりして、実用上無理の多い<sup>30</sup>この方法にはこだわらず、様々な方法で新語を作り出し、定着させてきた。このようにしてできた新語は、冒頭で述べたことの繰り返しになるが、その言語に定着する以前は、新造語を作り出す手間を省いて他の言語から受け入れられた外来語と同じ様に、その言語にとっては「よそもの」である。では、アイスランド語ではなぜ、言語にとっては同じ様な異物を生み出すふたつの方法の内、わざわざ手間のかかる新造語鑄造にこだわるのだろうか。この根拠としてもう一度先の臨時委員会の答申書から引用してみよう。

「この国で支持されてきた新造語鑄造重視の姿勢は、アイスランド語の言語保守のための要石のひとつである。この姿勢から外れて、代わりに自然な語形変化をせず、またアイスランド語らしい響きも持たない外来語を受け入れるような方策に転じることになれば、それがアイスランド語の言語構造、すなわち語形変化の仕組みや音組織に重大な干渉を及ぼすであろうことは議論の余地がない。<sup>31</sup>」

すなわち、ある新事物にアイスランド語での名称を作り出さなければならぬ時には、できた新語が、目新しいため「よそもの」に見えてしまうかどうかということよりも、様々な点で、既に確立されているアイスランド語の言語体系にうまくはまり込むことができるかが重要であり、また仮にこの条件を満たさない新語を受け入れてしまうと、そこから生じた言語体系の歪がやがてはその言語自体までも変えてしまう、ということだろう。

ここでは「言語はなぜ変化するか」といった議論には立ち入らないが、確かにこの答申書の主張は「議論の余地」なく正しいと思われる。例えば日本語でも、CD、ディスコ、ディズニーランドを「シージー、ジスコ、ジズニーランド」等と発音する人はもうほとんどいなくなったことからわかるように、外来語の影響で「本来」日本語の音ではなかったものが日本語の音素として認められるようになった<sup>32</sup>。この変化が日本語の言語構造に今後どのような影響を与えるかはまだ誰にもわからないが、それはとも

かく、ここにきてアイスランド語で今も盛んに行われている新造語鑄造がどのような（潜在的な）論理的根拠の上に成り立っているかがわかる。つまり、アイスランドの新造語偏重は一見したところ、外来語をとにかく締め出すという、ひとつの民族が独立を目指すときなどに盛んになる、典型的な言語純化の動きの延長線上にあるように見えるが、実際には、古い時代の言語構造を割とよく保持し続けてきた言語が分解してしまわないための、ある意味で選択の余地のない必要な手段だと言える。さらに念のために付け加えると、ここで特に新造語鑄造を要求するものとしてはアイスランド語の豊かな語形変化が挙げられよう。

### 3 . ?Rúna og ég förum þangað bæði<sup>33</sup>.

さて、今まではもっぱら単語（新造語）の問題を通してアイスランド語の言語育成について見てきたが、言語体系の他の構成要素、例えば構文についてはどうなっているのか、少し簡単に見てみよう。

現在、世界のほとんどの言語が、多かれ少なかれ英語からの影響を受けているが、同じゲルマン語のひとつとしてもとから英語に様々な点で近いアイスランド語などは、潜在的に「抵抗力」が弱いと考えられる。しかも、デンマークから完全独立を勝ち得てから半世紀が過ぎた今、アイスランド人が最もよくできる、また最も熱心に学んでいる外国語は英語であり、しかも大多数がかなり流暢に話す。このような状況の中、どのように英語のアイスランド語の文の構造に与える影響を防ぐのだろうか。

単語の流入については既に見てきたように様々な機関が活発に活動しており、また指摘するのも容易であるので、その気にさえなればくい止めることができよう。だが構文に対する影響となるとそう簡単にはいかない。まずどれがアイスランド語らしい文でどれがアイスランド語らしくないかは、場合によっては誰にも決めることができないだろうし、そうでない場合でもそういう判断は全く文毎に個別に議論するしかなく、単純な基本規則というものを決めることができない。この点については既に何度か引用した答申書でも、外国語教育の場で外国語を美しく自然なアイスランド語に訳すことができるように訓練する必要性を簡単に述べているだけ<sup>34</sup>で、

その美しく自然なアイスランド語がどういうものかについては論じられていない。また、いくつか外国語の影響による、アイスランド語らしくない文について指摘している文献を見ても、個別的な例をいくつか取り上げているだけ<sup>35</sup>であり、具体的な対策については述べていない。

アイスランド語の言語育成では、過去と現在の言葉の上でのつながりを重視することは既に見てきたが、この考え方を、外国語の影響による構文の変化の対策手段を探るためにも適用して出てくる発想としては、古い時代の文学作品を手本にする<sup>36</sup>、というのが挙げられよう。もっとも、これとて個別的な議論になることは避けられず、また今度はどこまで古い言語を手本にするかはっきりさせないと、言語純化的な方向に行ってしまう恐れもあるだろう。

もともと言語理論の分野においても、ある言語の構文全てを包括的、かつ網羅的に記述できる理論は存在しないのであるから、こうした個別的な手段しか採れないことは無理のないことなのかも知れない。筆者がアイスランド言語局に問い合わせたところでも、この問題に関してアイスランド言語委員会は、そういう質問を電話で受け付けた時に個別的に答えていく以上の活動は行っておらず、またその際どのような助言を行うかについてはそれぞれの局員・委員にまかされており、特に明確な共通のガイドラインのようなものはないということである。

おわりに

アイスランド語に特徴的な外来語排除の姿勢は、単なる言語純化主義の発現ではなく、自分達が蓄積してきた遠い昔からの文化遺産を現代社会にあってもなお引き継いで行こうという、明確な言語育成の決意実現のための必要な手段であることがわかったが、今アイスランド人たちがこのような意志を持つことができるためには、先人達の言語保守の努力と成功が前提となっているわけである。その意味でアイスランドの言語育成をさらに深く知るためには、当然その歩みをもっと過去から辿る必要があるだろう。

最後になるが、忙しい中、筆者のたどたどしいアイスランド語による取材に付き合い、また資料を提供して下さったアイスランド言語委員会のAri

Páll Kristinsson委員（国営ラジオ局Ríkisútvarpiðから選出）と、またアイスランドで生きたアイスランド語を学ぶ機会を与えて下さったアイスランド共和国文部省に深く感謝したい。

## 注

1. Sölvi (1992), 43; 家にテレビがあることはごく当たり前になり、人は本よりも映画やビデオ、衛星放送（局）、コンピューターと外国製のコンピュータープログラム、海外の音楽といったものに時間を割くことが多くなった。
2. 以降「アイスランド人」とはアイスランド語を母（国）語として話す人々を指すものとする。
3. 本文2章を参照。
4. Kjartan (1990), 108-110.
5. Baldur (1990b).
6. Sbr. Halldór / Baldur (1993), 28-43; Kjartan (1990), 129-130; Holmberg (1993), 5-6.
7. Halldór / Baldur (1993), 114 og 118-120; Kjartan (1990), 131; なおこのアイスランド言語委員会法は1990年に改訂され現在に至っている。Sjá Baldur (1995), 1.
8. Kjartan (1990), 130-131; Holmberg (1993), 6.
9. Sjá Baldur (1995), 1.
10. Halldór / Baldur (1993), 114-118.
11. 例えば1994年には1328回電話を受け付け、そこで1568の質問に答えたそうだと。Sjá Baldur (1995), 5.
12. Halldór / Baldur (1993), 123-128.
13. Halldór / Baldur (1993), 52-54 og 76-79.
14. Halldór / Baldur (1993), 99-100, 129-132 og 146; Baldur (1993), 6-7; sami (1995), 6-7; Kjartan (1990), 133.
15. Halldór / Baldur (1993), 97-98 og 132; Baldur (1993), 5-6; sami (1995), 3.
16. Halldór / Baldur (1993), 127; Baldur (1993), 10; sami (1995), 9; アイスラン

ド言語局のホームページ ( <http://www.ismal.hi.is> )。

17. Sjá t.d. Kjartan (1990), 116-118; Baldur (1987a).
18. Styrmir (1996), 6. 因みに、アイスランドでは1996年2月14日から高度情報通信網 ( I S D N ) の一般利用が開始されたが、この通信網を指す Samnet という新語は特に反論もなく定着し始めているようだ。
19. ここで括弧内は筆者による。

A: Érf rá hljónstrængu (Ég er að fara á hljómsveitaræfingu).

B: Hvasiru (Hvað segirðu)?

A: Ett hiddnalaus mar (Ertu heyrnarlaus maður)? Érf rá hljónstrængu!

B: Ettí hljóst (Ertu í hljómsveit)?

A: Já, vissir þaggi (vissirðu það ekki)?

B: Nei, e vissi þaggi (ég vissi það ekki).
20. Þorsteinn (1995).
21. Baldur (1995), 3-4 og 11-12.
22. 実際にはfaxという言葉もよく使われている。またbréfasímiはファックスの装置を指し、送信されてきた電波を受けて出てきた紙の方は símabréfと言う。Sjá t.d. Ari (1991a).
23. 同じ意味で稀にmálvöndunという言葉が使われることもある。
24. Sbr. Kjartan (1990), 9-10; Árni (1983b), 92-93; Sölvi (1992), 42.
25. ただし長らくアイスランド言語委員会の委員長を務め、その後言語局の局長として活躍を続けているBaldur Jónssonもこの諮問委員会の委員として名を連ねた。
26. Guðmundur / Baldur / Höskuldur / Indriði (1986), 3-9; Kjartan (1990), 139.
27. Sbr. Kjartan (1990), 145-148.
28. Guðmundur / Baldur / Höskuldur / Indriði (1986), 27:

Íslendingar hafa sett sér það mark að **varðveita** tungu sína og **eþla** hana.

Með varðveislu íslenskrar tungu er átt við að halda órofnu samhengi í máli frá kynslóð til kynslóðar, einkum að gæta þess að ekki fari forgörðum þau tengsl sem verið hafa og eru enn milli lifandi máls og bókmennta allt frá upphafi ritaldar.

Með eflingu tungunnar er einkum átt við að auðga orðaforðann svo að ávallt verði unnt að tala og skrifa á íslensku um hvað sem er, enn fremur að treysta kunnáttu í meðferð tungunnar og styrkja trú á gildi hennar.

Varðveisla og efling eru ekki andstæður. Eðli málsins, formgerð þess og sérkenni eiga að haldast. En málið á að vaxa líkt og tré sem heldur áfram að vera sama tréð þótt það þroskist og dafni.

29. Sjá t.d. Árni (1983b), 91-92; Ari (1991), 20.
30. 例えばアイスランド人は今世紀の初め頃まで、メートル法の諸単位にもアイスランド語らしい新語を作りだそうとしたが、例えば既にアイスランド語に存在していて、意味もはっきりしたögnという単語をミリメートルの意味で使おうとしたりしたこと等が原因で意見の一致がはかれず失敗に終わった。Sjá Kjartan (1990), 107-108.
31. Guðmundur / Baldur / Höskuldur / Indriði (1986), 55:  
**Nýyrðastefna** sú sem fylgt hefur verið hér á landi er einn af hornsteinum íslenskrar málverndar. Það hefði tvímælaust afdrifaríkar afleiðingar fyrir málkerfið, bæði beygingakerfi og hljóðkerfi, ef horfið yrði frá þeirri stefnu og brugðið á það ráð í staðinn að taka upp erlend orð sem hvorki tækju beygingum á eðlilegan hátt né hefðu íslenskt hljóðafar.
32. ただし、日本語ではある外来語を文の中で使うためには、後に助詞や動詞「する」等を付け加えるだけで別に語形変化の組織に影響はでないという違いがあるので、この主張の正しさがアイスランド語以外の全ての言語について同じように保たれるとは限らない。
33. Sjá Helgi (1984), 25. この文は外国語風 ( virðist hugsað á útlensku ) で、正しくは次のように言うべきだそうた:  
Við Rúna förum þangað bæði.
34. Guðmundur / Baldur / Höskuldur / Indriði (1986), 54.
35. Sjá t.d. Sölvi (1992), 90; Kristján E. (1990), 65-69; Helgi (1984).
36. Sbr. Olafur (1987), 89 og 92.

## 文献

- Ari Páll Kristinsson. 1991a. 25 nýyrði frá 1982-1990. *Málfregnir* 5.1, bls. 22-23.  
— 1991b. Íslensk málrækt andspænis nýjum heimi. *Málfregnir* 5.2, bls. 20-26.  
Árni Böðvarsson (ritstj.). 1983<sup>2</sup>a (7. prentun 1994). *Íslensk orðabók*. Reykjavík.

- 1983b. Málrækt, bókmenntir og fjölmiðlar. *Skírnir* 157, bls. 91-98.
- Ásgeir Blöndal Magnússon. 1989 (3. prentun 1995). *Íslensk orðsifjabók*.
- Baldur Jónsson. 1995. *Ársskýrsla Íslenskrar málstöðvar 1994*.
- 1993. *Ársskýrsla Íslenskrar málstöðvar 1992*.
- 1991. Málræktarsjóður stofnaður. *Málfregnir* 5.1, bls. 3-7.
- 1990a. Íslensk málvöndun. *Málfregnir* 4.1, bls. 5-13.
- 1990b. Orðanefndir. *Málfregnir* 4.1, bls. 23-25.
- 1989a. Málferfiðleikar Íslendinga í norrænu samstarfi. *Málfregnir* 3.1, bls. 12-15.
- 1989b. Málræktarspjall. *Málfregnir* 3.2, bls. 18-24.
- 1987a. Íslensk heiti fyrir AIDS. *Málfregnir* 1.1, bls. 25-26.
- 1987b. Íslensk málrækt. *Málfregnir* 1.2, bls. 19-26.
- 1976. *Mályrkja Guðmundar Finnbogasonar*. Reykjavík.
- Guðmundur B. Kristmundsson / Baldur Jónsson / Höskuldur Þráinsson / Indriði Gíslason. 1986. *Álitsgerð um málvöndun og framburðarkennslu í grunnskólum*. Samin af nefnd á vegum menntamálaráðherra 1985-1986. (Rit Kennaraháskóla Íslands, B-flokkur: Fræðirit og greinar 1).
- Halldór Halldórsson. 1986. *Íslensk þjóðfræði - Ævisögur orða 3*. Alþýðlegur fróðleikur um íslensk orð og orðtök. Reykjavík.
- Halldór Halldórsson / Baldur Jónsson. 1993. *Íslensk málnefnd 1964-1989*. Afmælisrit. (Rit Íslenskrar málnefndar 8). Reykjavík.
- Helgi Hálfðanarson. 1984. *Gætum tungunnar*. Reykjavík.
- Holmberg, Karl Axel. 1993. Isländsk språkvård nu och förr. Med en sidoblick på svenskan. *Scripta islandica* 44, bls. 3-18.
- Indriði Gíslason / Baldur Jónsson / Guðmundur B. Kristmundsson / Höskuldur Þráinsson. 1988. *Mál og samfélag*. Um málnotkun og málstefnu. Reykjavík.
- Jakob Benediktsson. 1953. Arngrímur lærði og íslensk málhreinsun. Árni Böðvarsson / Halldór Halldórsson / Jakob Benediktsson (ritstj.). *Afmæliskveðja til Alexanders Jóhannessonar*, bls. 117-138. Reykjavík.
- Jónas Kristjánsson. 1992. Íslensk mál og umheimurinn. *Málfregnir* 6.1, bls. 3-13.
- Kjartan G. Ottósson. 1990. *Íslensk málhreinsun*. Sögulegt yfirlit. (Rit Íslenskrar málnefndar 6). Reykjavík.
- Kristján Árnason. 1990. Íslensk málrækt á því herrans ári. *Málfregnir* 4.2, bls. 5-14.

- Kristján Eiríksson. 1990. *Máltækni*. Reykjavík.
- Larsen, Kaj. 1993. Hin fyrsti málreinsarin. *Málting* 3.3, bls. 12-19.
- Niclasen, André. 1992. Tann skeiva málrøktarkósinn. *Málting* 2.1, bls. 2-11.
- Ólafur Halldórsson. 1987. Hvað getum við lært af málfari á bókmenntum fyrri alda?  
Ólafur Halldórsson (ritstj.). *Móðurmálið*. Fjórtán erindi um vanda íslenskrar tungu á vorum dögum. (Vísindafélag Íslendinga (Societas scientiarum Islandica) ráðstefnurit 1), bls. 85-92. Reykjavík.
- Poulsen, Jóhan Hendrik W. 1991. Hugleiðingar um málrøktarmannin Chr. Matras. *Málting* 1.1, 4-14.  
— 1988. Færeysk málrækt í hundrað ár. *Málfregnir* 2.2, bls. 10-12.
- Sigfús Blöndal (ritstj.). 1920-1924 (Ljósprentuð útgáfa 1980). *Íslensk-dönsk orðabók*. Reykjavík.
- Styrmir Guðlaugsson (ritstj.). 1996. Ráfað á vefalda um rafgeima. *Tölvuheimur* 2.2, bls. 6.
- Svavar Sigmundsson. 1990-1991. Hreinsun íslenskunnar. *Íslenskt mál* 12-13, bls. 127-142.
- Sölvi Sveinsson. 1992<sup>2</sup>. *Íslensk málsaga*. Reykjavík.
- Þorsteinn G. Gunnarsson. 1995. Hvaða vit er í því að auglýsa tungumál? *Frjáls verslun* 56.1, bls. 68-69.